The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

〔研究論文〕

大村はまの年間カリキュラムに位置づく入門期古典学習指導

坂　東　智　子

1．問題の所在

高校生の７割以上が古文を好きだと思っていないという「平成14年度高等学校教育課程実施状況調査」[1]国語Ⅰ（31,717名）の調査結果は当時大きな反響をよんだ。この影響もあって，中学校での古典指導は，「古典嫌い」を生じさせないように，古典に対する学習者の興味・関心を高め，古典に親しむ態度を育成することが肝要だとされている[2]。

筆者が平成21年に徳島県内の中学生1,342名に実施した「古文学習に関するアンケート」[3]では，中学校１年生（465名）の37.5％が古典の授業が「好き，やや好き」と回答した。高校生ほどではないが，古典の授業が本格的に始まる中学１年生の段階で６割以上の学習者が古典の授業を好んではいない。

先の筆者の調査によると，中学１年生が古典の授業を嫌う理由の中には，「古典やっても今に関係ないと思うから」「今は今の言葉で話したり書いたりするので昔のことばは必要ないと思うから」というものもある。古典学習入門期においてすでに，古典を学ぶことの必要性や意味を実感できず古典を学ぶこと自体に疑問を抱いている学習者も少なからず存在している。変化が激しく情報量の多い現代社会を生き抜かなければならない学習者にとって，現代日本語や英語を学ぶ必要性はすんなり納得できても，古典を学ぶ意義を積極的に見出しにくいのはある意味では首肯されることである。

新学習指導要領では，小中高ともに，〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕が新設された。古典指導は「読むこと」の領域だけでなく「話すこと・聞くこと」や「書くこと」領域との関連指導も可能となった。その一方で，新指導要領における中学校の古典指導に配当される授業時数は，これまでと同様に年間10～20時間が想定されるている[4]。古典の指導はこれまでは年間のある時期に集中的に行われることが多かった。それに対して，「古典嫌い」を解消し「古典に親しむ」を実現するためには，年間を通じてバランスよく指導するべきではないかという提案もなされている[5]。

古典を学ぶ楽しさを学習の過程で自ら発見し，学習者が古典学習の意味や必要性を実感するためには，「古典に親しむ」と同時にことばの力に培い，他の国語学習と有機的に連関した古典学習指導が年間指導計画の中に位置づけられる必要がある。

2．本稿の目的

単元「古典のなかに見つけた子ども」(昭54)[6]は，大村はまが公職最後の年に中学１年生を対象として行った古典学習指導である。大村はまは，「昭和54年は国際児童年であったので，『知ろう　世界の子どもたちを』という単元の学習を秋に予定し，春早早からその学習資料を集めていた。それでよく『子どもの生活』が話題になることがあった。（中略）私は，古典のなかに，もっと子どもを見つけて『古典のなかの子ども』という古典の学習を展開しようと考えついた。」[7]と，本単元の構想経緯を語る。学習者の興味・関心をもとに単元が構想され，「子どもの生活」というテーマで他の国語学習と連関した古典学習指導であった。

大村はまは後年，本単元の学習について「もうそれは『親しむ』ということが目標だったことを忘れるぐらい，溶けこんでいたと思います。」[8]と述べている。しかし，本単元の学習者も初めから古典の世界に溶けこんでいたわけではない。学習記録[9]には，「何といっても，おもしろくて，疲れて。というのは，古典の学習でした。（中略）いろいろな作品を読んでいくうちに，疲れてしまいました。何だか意味がつかみにくかったからです。それで家で何回か読んでみると少しずつ意味がわかってきておもしろくなります。」[10]といった記述が見られる。いかにも難しそうな古典が「わかる」ということは中学生としてのプライドをくすぐる。初めはわからなくてもそのうちに「わかるようになるはず」と考えられ

NII-Electronic Library Service

The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

れば，難しさはむしろ学習意欲を生む契機ともなる。「難しくてわからない」けれども，繰り返し読んでみようと学習者が自発的に考え，それを行う必然性のある古典学習であったといえよう。その学習方法は朗読や話し合い，発表会といった４月から繰り返し行われているものであった。一方，傍注テキストが作成され，聴写や視写といった学習活動は古典単元独自のものである。これらを具体的に明らかにすることで，現在の中学生の「古典嫌い」を解消する手掛かりを得たい。

先行研究[11]では，『知ろう　世界の子どもたちを』と本単元との関連は指摘されている。しかし，本単元を年間カリキュラムの観点から考察した論考は管見の限り見出せていない。

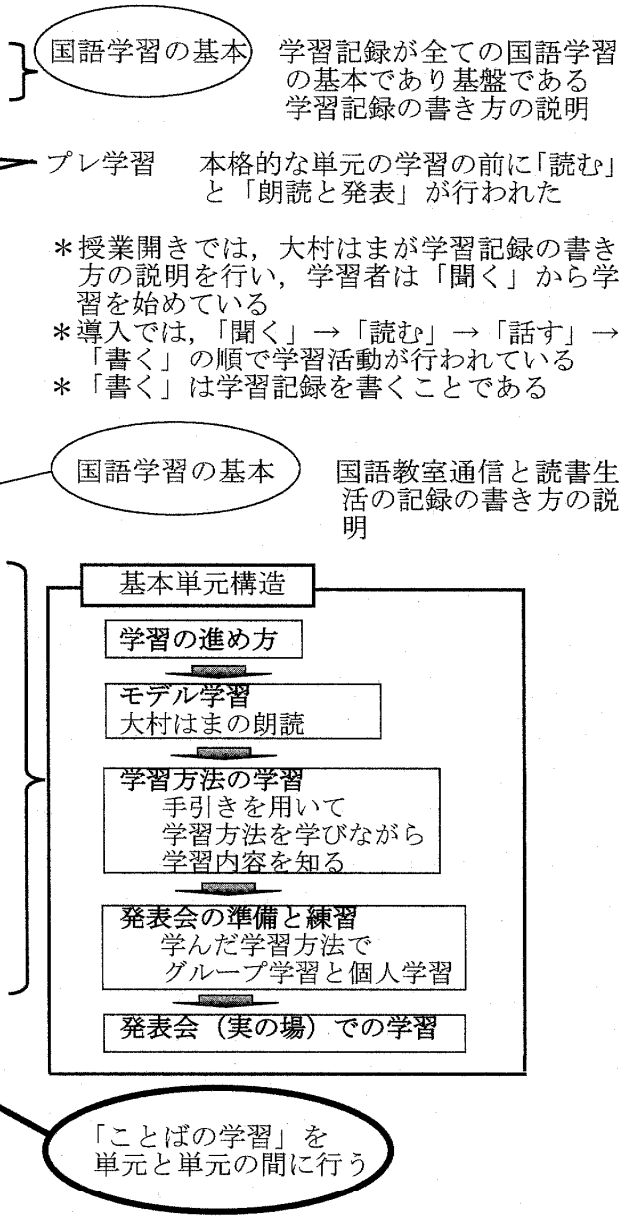
以上のことから，本稿では，大村はまの指導記録と学習者の学習記録をもとに昭和54年度１年生の国語年間カリキュラムを復元し，それを考察することにより，中学校入門期の古典学習指導を成功させるための年間カリキュラムの条件を明らかにする。

３．石川台中１年Ｂ組（昭54）国語年間カリキュラム

昭和54年11月22日に約100名の参観者を迎え，第８回実践発表会が石川台中学校図書館で開催された。授業を担当したのは１年Ｂ組である。そこで，当日朗読発表をした２名の学習記録（２・３学期各１冊ずつ）とＢ組１学期の４冊の学習記録，および大村はま作成の国語教室通信を資料として，年間の国語学習項目を調査し一覧表（表１）を作成した。

表１　１年Ｂ組（昭54年）国語科年間カリキュラム

時間	月日	単元	学　習　内　容
1	4/12	＊導入・学習記録の書きなど	学習記録の書き方　＊
2	4/16		学習記録の書き方
3	4/17		名前が書いてあるか検査
4	4/18		読む「中学校には」
5	4/19		1.「中学校には」を読んでの感想 2.朗読と発表
6	4/21		民話を読む
7	4/23		朗読と発表
8			8～9は不明
10	4/26		不明
11			テスト
12	5/1		1.テストの始末 2.読書生活の記録の書き方 3.日記・読みたい本
13	5/2		先生が病気で本を読んだ
14	5/7		習字
15	5/8		「文章教室」を読む
16	5/10		1.国語教室通信について ＊ 2.読書生活の記録の書き方
17	5/12	Ⅰ国語発表会	発表会学習の進め方
18	5/14		「ひばりの子」を読む
19	5/15		発表会の内容，学習の進め方
20	5/16		グループで話し合う。朗読のくふうの仕方
21	5/17		グループの話し合い
22	5/22		国語発表会の準備と練習
23	5/23		国語発表会の準備と練習朗読台本
24	5/24		国語発表会の準備と練習テストについて
25	5/26		国語発表会の準備と練習 プリントの始末
26	5/29		テスト
27	5/31		注意と評価，日程，練習
28	6/2		国語発表会第10グループ
29	6/5		国語発表会第9第8グループ
30	6/6	Ⅱことばを知ろう	ことばをひろげ深めよう
31	6/7		もっとことばを知ろう
32	6/11		ことばの意味と使い方
33	6/13		いろいろなことばの使い分け
34	6/14		1.よく知っていることばのいろいろな意味 2.「話」を中心にいろいろの言葉



NII-Electronic Library Service

		う	
35	6/16		文集
36	6/17		国語発表会第7第6グループ
37	6/19		テストの評
38	6/20		テストの確かめ，文集
39	6/21	I	国語発表会第5第4グループ
40	6/23	続き	国語発表会第3第2グループ
41	6/25		国語発表会第1グループ，講評
42	6/26		1.テストとは 2.夏休みの読書 3.記録のまとめ方
43	6/27	学	1.学習記録のまとめ方 2.目次の作り方
44	6/28	記	学習記録のまとめ
45	6/30	録	1.学習記録の仕上げ 2.木のうた 夏休みの読書
46			46～50は学習記録のまとめ（推察）
51	7/11		学習記録の提出
52	7/14		読書生活の記録，本紹介
53	7/17		暑中見舞いの葉書を書く
54	7/18		文集
55	9/4	毛	55～58毛筆書写練習
59	9/11	筆	毛筆書写（清書2枚提出）
60	9/12		夏休み読書記録の整理
61	9/13	III	ことばのきまり
62			不明
63	9/17	こ	文節
64	9/18	と	単語のいろいろ
65	9/19	ば	品詞のいろいろ
66	9/20		同じことば・色々のことば
67	9/25		「表現くらべ」学習準備
68	9/26	IV	「表現くらべ」進め方
69	9/27		「表現くらべ」進め方
70	9/29	表	「表現くらべ」
71	10/2	現	「表現くらべ」研究
72	10/3	く	「表現くらべ」発表準備
73	10/4	ら	「表現くらべ」発表準備
74	10/6	べ	74～84「表現くらべ」発表と話し合い
85	10/24		「表現くらべ」まとめ
86	10/25		テスト評 読書生活の記録
87	10/27	IV	「表現くらべ」まとめ
88	10/29		まとめの提出
89	10/30	V	意見を読む 育てる 書く
90	10/31		意見を読む 育てる 書く
91	11/1	書	この絵がさし絵になるように物語りを書く
92	11/5	く	絵に誘われて「私のお話」
93	11/6		「古典のなかに見つけた子ども」学習のあらまし
94	11/7		古典を読む
95	11/10	VI	古典を読む
96	11/12		朗読テスト
97	11/13	古	謡曲「天鼓」
98	11/14	典	謡曲「天鼓」
99	11/15	の	担当のところを読む，手引きを作る
100	11/17	なか	練習 書くところ，暗唱するところ，今のことばにしてみる
101	11/19	に	「更級日記」の読む箇所の分担を決める
102	11/20	見	意味の確認と朗読練習
103	11/21	つ	研究授業の注意と練習
104	11/22	け	研究授業 1.徒然草（243 段）2.更級「あずまぢの」
105	11/24	た	テストについて
106	11/26	子	発表（更級「足柄山」）
107	11/27	ど	発表（更級「物語」）
108	11/28	も	発表（更級大納言の姫君）
109	11/29		テスト準備，記録作成準備
110	12/3		期末テスト
111	12/4		学力テスト

国語発表会の続き
国語発表会は6/2～6/25まで6時間にわたって行われた
発表会の進め方は大村はま作成の手引きプリントにより示された
開会のことばや閉会のことばの具体例とそれを言う声の調子などが書かれた詳細な手引きである

学習記録のまとめ
目次の作り方などを大村はまの手引きプリントによって学びながら作業を進めている
学習記録のまとめの作業は，授業時間中に行われたものと推察される

1学期の終わりには「暑中見舞い」を書く学習が行われている
2学期の最初は毛筆書写練習が行われ集中力に欠けやすい時期の学習活動のくふうがなされている

「ことばの学習」を単元と単元の間に行う

IIIはIVの準備学習
IVの学習記録には形容詞・形容動詞といった品詞名が頻出している

IV 単元「表現くらべ」
隅田川花火大会の新聞記事を学習材とする
学習材は変わっても
学習の進め方→発表会の準備と練習→発表会→学習記録のまとめ
という学習方法，単元の構造は
1学期の国語発表会と同じ

2学期の半ばになって初めて
本格的な自己表現としての「書く」活動
作文（意見文や創作文）学習が行われる

古典単元も基本的な単元構造は同じ

単元前半に古典学習ならではの手立て
傍注テキストを見ながら大村はまの朗読を聞く，朗読テープを聞く，
グループ分けのための朗読テストなど

1学期5月「ひばりの子」の学習がモデルに

暗唱箇所を決める
朗読台本を作る
現代のことばに直す
解説する内容を決める
→ 繰り返し読む

単元後半は発表会（これまでの単元と同じ）

学習者は他のグループの発表を聞き
暗唱箇所をワークシートにペンで聴写する

NII-Electronic Library Service

112	12/5		発表（枕草子）
113	12/6	Ⅵの続き	発表（源氏「若紫」）
114	12/10		発表（宇治拾遺など）
115	12/11		発表（堤中納言など）
116	12/12		発表（義経記など）
117	12/13		発表（平家物語）
118	12/14		発表（平家物語）
119	12/17		発表（土佐日記）
120	12/18		発表（土佐日記）
121	12/19		学習記録のまとめ
122	12/22		学習記録のまとめ
123	1/9	Ⅶ	「このことばこそ」
124	1/10	このことばこそ	1.このことばこそ 2.生活の場面を書く
125	1/12		「このことばこそ」
126	1/14		この気持ち，このようすを表わすことば
127	1/16		「このことばこそ」
128	1/17		「このことばこそ」
129	1/19		「漫画について考える」学習の進め方
130	1/21		1.アンケート提出 2.統計（グループで）
131	1/22		アンケート整理
132	1/23		アンケート整理
133	1/24		漫画はよいということを表わすことばのいろいろ
134	1/26	Ⅷ	漫画をどういうことばでほめているか
135	1/28	漫画について考える	漫画について考える
136	1/29		漫画について考える
137	1/30		1.予定確認 2.資料の整理と調べ方
138	1/31		統計を見て考えたこと
139	2/2		統計の数字の中に見つけたこと（話し合い）
140	2/4		私の意見まとめ方（漫画）
141	2/5		考えを書く（漫画）
142	2/6		考えを書く（漫画）
143	2/7		考えを書く（漫画）
144	2/9		考えを書くを仕上げて提出
145	2/12		話し合い 質問と意見
146	2/13		話し合いを豊かにするために意見を読み考えを書く
147	2/14		研究授業の準備（話し合いの仕方，話し合いの内容を豊かにする）
148	2/15		発表会 漫画について
149	2/16		英語
150	2/19		漫画について考える
151	2/20		対談を聞く（漫画）
152	2/21		テストについて 漫画
153	2/23		考えを書く（漫画）
154	2/25		テストについて
155	2/26		漫画について考える
156	2/27		資料を整える
157	3/3		期末テスト
158	3/5		学力テスト
159	3/6	Ⅸ	「知ろう世界の子供たちを」学習の進め方
160	3/8	世界の子供達	文集提出 自分で調べる
161	3/10		「知ろう～」調べていく
162	3/11		テスト評 「知ろう～」
163	3/12		「知ろう～」発表会
164	3/13		「知ろう～」発表会
165	3/15		「もう一つの歩き方をさぐる」
166	3/17		1.このことばこそ 2.お話会の準備
167	3/22		お別れお話会

古典学習独自のものとしては
- 短い一節の原文暗唱
- 担当作品，暗唱部分の解説
- 発表者は繰り返し暗唱をし続ける
- 聞き手は，暗唱部分をペンで書く

文語の文章の調子が快い雰囲気を作る
発表担当グループ以外の生徒も
覚えるともなく，ある程度そらんじる

「ことばの学習」を
単元と単元の間に行う

Ⅶは
生活場面に
あったことば
の学習
これはⅥ古典
単元でも行われ
ている

Ⅷ 単元「漫画について考える」
新しい学習方法としてアンケート
調査とその集計，整理が行われた

「ことば」に着目させた学習

統計を根拠に考えたことを
話し合う，話し合う内容をもたせる

３学期の単元の特徴
意見を「書く」学習が取り入れられている

話し合い，発表といった
学習活動は年間を通じて
繰り返し行われてている

考えを「書く」活動が行われている
書く内容を持たせるために
意見を述べやすいように
他の意見文を読んで，また対談を聞
いてそれに対する考えを書かせてい
る

Ⅸ 単元「知ろう世界の子供たちを」
「国際児童年」であったため，４月から
学習者は資料集めを行っていた
基本的な単元構造は
一学期のⅠ「国語発表会」と同じ
資料の整理と資料を用いて「調べる」とい
う学習活動が新たに取り入れられている

既習の学習方法を基本としながら，
単元の学習に適した新しい学習活動を
取り入れている

NII-Electronic Library Service

The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

4．古典学習は年間カリキュラムにどう位置づくか

4.1.　学習記録と年間カリキュラム表の考察

前掲表1の1年B組国語年間カリキュラムとB組学習記録から，古典学習が年間カリキュラムにどう位置づくのかに関して次の10項目を見出した。

(1)　学習記録を書くことが，古典学習に限らず全ての国語学習の成立基盤となっている。

学習記録は毎時間の授業記録や感想を書くことと，単元や学期の終わりにまとめる作業が行われる。42～46時間目，88時間目，121～122時間目など，年間を通じて指導され，学習者は個々に学習記録を作成している。学習記録を書くことは，学習者自身が学びを振り返り，何を学んだか，その中で何を感じ考えたか，出来るようになったことは何かなど，学びの成果と残された課題を明確にしていく過程でもある。大村はまは，「心の中を字で書けることは国語の一番の力」と折々に話していることが学習記録に記述されている。学習記録を書くことそのものが，書く力，認識力や思考力，ことばの力，国語の力を伸ばすものであった可能性が高い。

(2)　4月～5月にかけて，国語学習の方法を学習しながら学び，身に付ける学習や入門単元が行われた。

4月～5月にかけて，学習記録の書き方・読書生活記録の書き方・国語教室通信についての丁寧な説明がなされている。Ⅰ「国語発表会」(18～41時間目）は入門単元であり，国語学習の方法を学習しながら学び，身に付ける単元である。朗読の仕方やグループでの話し合いの仕方，発表会の内容と進め方が大村はまの詳細な手引きプリントによって示されている。学習者は実際にグループに分かれ，朗読発表会の準備をしながら，話し合いの仕方や朗読のくふう，発表会の進め方を学んでいく。その総復習として10グループによる朗読発表会が開かれた。

(3)　グループ活動，話し合い，発表会は，大村はま単元学習の基本であり，年間を通して繰り返し行われた。＊以下の（）内の数字は授業時間数

Ⅰ「国語発表会」(18～41)，Ⅳ「表現比べ」(67～88) やⅥ「古典のなかに見つけた子ども」(93～120) でも行われている。学期が進み，学習材は変化しても，学習方法のベースは変わっていない。後掲資料1の学習者A[12]「この前と同じように」（波線部）はこのことを示している。

学習者Aは最初は①古典学習に対して消極的であった。しかし，②傍注テキストを用いて繰り返し読むことによって意味が分かるようになり学習が楽しくなっている。③一学期から行っている「朗読」学習の成果である。④学習方法とテーマにより学習意欲が湧き成果が得られたことが自覚されている。

資料1　学習者A　学習記録のあとがきの一部

> 古典。それは何か。先生から緑色の表紙のずっしりとした，本を配られた時，①私はその本を読むということがあまり好のまなかった。古典というものは難しい昔の物語であると聞かされていたのだ。そんなに難しいものをやるのかしら。そのように考えながらパラパラとページをめきうって見た。一番最初にめくれたのは「徒然草」であった。②読んでみると，文章の右には現代文，左は昔の文とまあ本当にだれでも読めるすばらしい本であった。ずっと読んでいってくり返しくり返し読んで行く内にどんどん意味が分かっていき楽しくなって行った。又，この前と同じように班に分かれて練習していった。（中略）この日は百人ものお客様がいらっしゃって私たちの発表をお見になった。心のひびきは高くなっていて，となりの人にまで聞こえるぐらい大きかった。しかし私たちは決してこのことがいやだったとは思わない。③暗唱もりっぱに言えた。朗読も大きな声でハッキリできた。これはみんなこのお客様のおかげであると思う。④いちいちそんな古典の意味よりも，その中に出てくる子供を調べることによってやる気がおき，そしてこのようなりっぱな発表が出来たのだろう。（丸数字，下線は引用者による）

(4)　大単元の間に必ず「ことば」の学習が行われる。

Ⅱ「ことばを知ろう」(30～34)，Ⅲ「ことばのきまり」(61～66)，Ⅶ「このことばこそ」(123～128)。ⅢはⅣ「表現くらべ」の準備学習である。

(5)　昭和54年は国際児童年であり，年間の学習テーマとして「子どもの生活」が設定されていた。

Ⅳ「古典のなかに見つけたこども」，Ⅷ「漫画について考える」，Ⅸ「知ろう　世界の子供たち」などである。学習者は，年度初めから「子供の生活」についての資料を収集しており，身近な存在の子供を扱った古典教材は，年間の国語学習テーマと関連した学習者の興味関心を喚起するものであった。

(6)　古典単元の単元構造は，Ⅰ「国語発表会」(18～41)，Ⅳ「表現比べ」(67～88) と類似している。

単元構造がそれまでの学習単元と類似していること，学習方法が既習のものであることは，初めての古典学習であっても学習者に安心感を与える。

NII-Electronic Library Service

(7) 古典単元独自の手立てが単元前半になされ，単元後半の発表会学習は既習のものであった。

テキストの工夫（大村はまが傍注テキストを作成），指導者の朗読から学習を始める，原文の暗唱，ワークシートの作成，視写聴写，書写学習を取り入れるなどの古典単元独自の手立てがなされている。

(8) 古典単元は，年間テーマと学習方法の両面で年間カリキュラムに位置づけられている。

(9) 自己表現としての「書く」学習，つまり作文は，２学期から始められた。

「聞く・話す・読む」と「記録を書く」から始めて，２学期から自己表現としての，Ⅴ「書く」(89～92)，Ⅷ「漫画について考える」(129～155)。

(10) 古典学習に限らず全ての国語学習が言語生活教育の場となっている。

4.2. 言語生活教育の場としての古典学習

Ⅳ「表現くらべ」では，花火に関する４社の新聞記事を学習材として「光の乱舞」と「光の雨」，「上空に咲く大輪」と「巨大輪」では受ける感じがどう異なるかを比べたり，「華やか」と「華麗」の比較を行っている。後掲資料２は，学習者Ａ「表現くらべのまとめ」の記録の一部である。

資料２　学習者Ａ　学習記録「表現くらべ」の一部

二.「華麗を比べて」
朝日……華麗　　毎日……立川なども華やかに
読売……遠い両国大花火の華やかさ
東京……ことしもまた華麗に七色のにじがかかった
1. 華麗の「麗」とは「うるわしい」という意味があり，又，「華」は「花」と同じ意味であるが「華」の方が美しい感じがよせられる。朝日の「華麗」と東京の「華麗」は同じ字であり同じ意味でもある。しかし，朝日のようにただ「華麗」よりも東京のように文の中に「華麗」ということばが含まれるととても打ちあげられた花火が花のように美しい。それに東京の「華麗に七色のにじ」のように「七色のにじ」を「華麗」ということばよりよく「きれいな花火」を表している。（後略）

資料２の記述は，語彙を豊かにすることだけでなくことばの感覚を磨き，微妙なニュアンスの違いを話し合い言語化することによって読解力や表現力を高めるという学習を推察させるものである。

古典学習でも大村はまは，「かわいい」と「いじらしい」「あいらしい」「けなげな」の語の用いられ方に着目させ，意味の違いやどの語がぴったりとした表現かを考えさせ，日本語の繊細さや美しさに目を向けさせている。学習者Ａの古典単元の学習記録に次のような記述がある。

資料３　学習者Ａ　学習記録「宇治拾遺物語」の一部

兒かいもちするに空寝したること／　点がうってない所で切っていたので気を付けた方がいい。又，もう少し大きな声で朗読した方がいいと思う。ここに出てくる子供を「いじらしい」といい，日本語の最も美しいことばである。大変いじらしい気持ちである。／　田舎兒桜散とて泣事　／ここに出てくる子供は「いとおしい」という。「いじらしい」も「いとおしい」も他のことばには代えられない美しい日本語だ。

西尾実は，「読むこと・書くことにおける，ひとつの語句の学習にあたっても，それは抽象された一語句ではなく，言語生活そのものとしての一語句として学習されなくてはなりませんし，話すこと・聞くことにおける，ひとつの語音にしても，それは，抽象した語音としてではなく，あくまで，全文の語調・語勢のあらわれとして，さらにいえば，言語生活そのものとしての文体・文意を担っている語音として，話し・聞かなくてはなりません。」[13]と述べる。古典学習における語彙の学習も，宇治拾遺物語の「兒かいもちするに空寝したること」では「いじらしい」を，「田舎兒桜散とて泣事」では「いとおしい」を学び，「かわいい」の一語では表現できない子供の姿をことばによって捉え，細やかな認識の網を獲得する場となっている。ここでは，古典だということを忘れるぐらい，いまの友だちの逸話を聞くような気持ちで「いじらしい」や「いとおしい」の語が場面に即して学ばれている。古典学習として独立した学習ではあるが現代語の語彙学習の場ともなっている。学習者の生活に根付く，言語生活を豊かにすることばの学習が行われている。

大村はまは，「ことばはたった一つですけれども，ほんとうにわかったというときには，私はたしかに心がそれだけ太ってくるし，また，おおげさな言い方をすれば，人生の一部がほんとうにわかっていくのではないだろうかと思います。」[14]と述べる。

お餅ができるのを待っていたようで，呼ばれてもすぐには返事ができずにいる気の弱い子どもを，「いじらしい」ということばで捉えることによって，その子どもの気持ちが自分のことのようにわかると同時に，「いじらしい」を生きたことばとして学び，

NII-Electronic Library Service

The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

古典作品はことばを媒介として学習者の現在と血の通った繋がりのあるものとなる。「ことばは人間を開いてみせる窓」[15]という大村はまの言語観は，古典学習においても貫かれ具体化されている。

4.3. 入門期古典学習指導の実際

中学１年の古典学習入門期において本単元の学習がなぜ成立したのかを以下に考察する。

(1) 傍注テキスト作成と大村はまの朗読

大村はまは，「テキストは，ほかのものと同じ考え方，同じ方法で作成したが，ただ，今度は表記を，迷いつつ，なやみつつ，現代表記にした。」[16]と記す。言語抵抗を軽減し意味のよくわかる，中学１年生の古典授業としての工夫がなされている。単元導入時の朗読は傍注テキストを用い大村はま自身が行う。原文をゆるやかに読み聞かせると，右側の書き入れが本文といっしょに学習者の目に入り，原文の調子を耳で聞きながら意味は口語で受けとめ，古典にじかに触れることができるという，考えぬかれた手だてとしての傍注テキストと朗読である。

(2) 学習者全てが取り組める学習課題の設定

本単元の学習の実際についての全集の記述は極めて少ない。以下が学習についての説明の全文である。

> 学習の実際は，朗読が主であるが，次の二つの作業を加えた。／(1)暗唱　それぞれの担当の中の短い一節を取り上げ，暗唱する。／(2)暗唱の発表　朗読の発表のあと，その暗唱部分について短い解説をして，暗唱をする。/ 聞き手は，その暗唱の部分を「朗読のあとのひととき」に，ペンできれいに書く。担当グループは，みんなの書くあいだ，繰り返し，暗唱しつづける。文語の文章の調子が，一つの快い雰囲気をつくる中で，担当グループ以外の生徒も，覚えるともなく，ある程度そらんじていくようであった。[17]（下線は引用者による）

暗唱は担当箇所の短い一節であり，学習者に大きな負担を掛けてはいない。「朗読のあとのひととき」にペンで暗唱部分を書くことは全ての学習者が負担なく取り組める活動である。グループに分かれて作品を担当しているため，他のグループの暗唱や暗唱部分についての解説を聞くのを学習者は楽しみにしていたと推察される。発表担当の作品は，暗唱部分の短い一節を決定するために，さらに朗読の仕方を工夫したりその部分の解説をするために，繰り返し読むことが必然を持って行われたと考えられる。

(3) 熱中できる古典学習の成立

98時間目の「今日の感想」に学習者Ａは，「今の現代文に直す時に，どのようにしたら，調子がよくて感じがいいかを考えていたらすぐにチャイムが鳴ってしまった。」と記している。ただ，現代文に直すのではなく，原作の味わいや調子を生かすことを自発的に行っており学習者は古典学習に熱中している。さらに，聞き手を意識した現代語訳は西尾実のいう言語生活そのものの学習である。

(4) 古典学習の方法は既習の学習方法であった

99時間目で学習者は朗読のための手引きを作成している。これは，20・21時間目で行われた学習と学習材は違っても同じ学習である。104時間目には研究授業が行われた。106～120時間目はグループ発表である。古典単元でも，朗読や話し合い，発表が行われ，既習の学習方法が生かされている。

5．結論と今後の課題

大村はまは，中学１年の国語学習入門期において，学習記録の書き方をはじめ，話し合いの仕方，発表会の進め方といった学習方法を学ばせる学習を丹念に行っている。その後，それらの学習方法を用いた学習経験を積ませ，単元が終わる度に学習記録をまとめるという作業をさせて，学びの過程と成果を言語化し振り返らせている。何を目標としてどう学んだのか，学ぶ過程で何を感じ考えたのかを学習者は学習記録を書くことで再認識している。この作業によって，学習者はこれまでの小さな成功体験の積み重ねを自覚し，新しい学習への期待と自信を抱いている。11月～12月にかけての古典単元でも，学習方法は変わらず，４月から準備され経験を重ねたものであった。古典の朗読も，５月の「ひばりの子」の朗読学習がモデル学習となり，朗読のくふうについての話し合いがグループごとに行われている。こうした既習事項やこれまでに習得した学習方法が古典での学習を支えている。古典単元は学習方法とテーマの両面で年間カリキュラムに位置づけられたものであった。

本稿での考察により，中学校入門期の古典学習指導を成功させる年間カリキュラムの条件として以下の６点が明らかになった。

(1) 国語学習の方法を学習しながら学び，身に付ける学習が学年始めに行われること。
(2) 学習の記録をつけること。
(3) グループ活動，話し合い，発表会といった学習

NII-Electronic Library Service

The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

活動が年間を通して繰り返し行われること。

(4) どの単元でも「ことば」を意識した学習が行われること。

(5) 古典単元での学習方法はこれまでの国語学習で既習のものを基本にし，全ての学習者が無理なく取り組める学習活動を中核に置くこと。

(6) 他の国語学習と関連し，学習者が興味・関心をもつ古典単元のテーマ設定がなされること。

特に入門期の古典学習指導は他の国語学習との連関をはかり，古典学習と現代文学習との垣根を低くする工夫が必要である。

古典学習そのものを成功させるためには，学習記録の形態をワークシートなどで工夫する，テーマの設定や教材（テキスト）準備については教科書と補助教材を適切に利用するなどして，指導者の負担が重くなりすぎないようにすることも大切である。

中学２・３年生の古典学習指導を年間カリキュラムにどう位置づけるか，古典単元のテーマとしてどのようなものが相応しいかについての考察は今後の課題としたい。

〔注〕

1 平成14年11月12日に国立教育政策研究所が実施した調査である。以下のHPによった。(http://www.nier.go.jp/kaihatsu/katei_h14/index.htm)
「平成14年度教育課程実施状況調査（高等学校）ペーパーテスト調査集計結果及び質問紙調査集計結果」（国立教育政策研究所教育課程研究センター），2004，pp. 81-85

2 河野庸介（2008）編著『中学校新学習指導要領の展開国語科編』明治図書，p. 28

3 筆者が徳島県内の３つの中学校で１～３年生1,342名を対象に行ったアンケート調査の結果による。「あなたは古典（たとえば竹取物語や故事成語や論語など）の授業は好きですか。」という質問に対して，中学１年465名の12%が「そう思う（好き）」，25.5%が「どちらかといえばそう思う」と回答した。「どちらともいえない」は27.9%，「どちらかといえばそう思わない」は19.5%，「そう思わない」は14.8%であった。

4 ２に同じ，p. 162

5 笹平みどり（2009）「三つの言語活動を柱としたカリキュラム作り」『実践国語教育研究』No. 292（特集：伝統的な言語文化と国語の特質の指導），明治図書，pp. 23-26

6 大村はまが昭和54年11月～12月にかけて石川台中学校１年生を対象に行った実践である。大村はま（1983）『大村はま国語教室　第３巻　古典に親しませる学習指導』筑摩書房，pp215-294

7 ６に同じ，pp. 215-216

8 大村はま（1983）『さまざまのくふう　大村はまの国語教室２』小学館，p. 121

9 鳴門教育大学図書館大村はま文庫には2060冊の学習記録が所蔵されている。学習記録は学習者が自分の学びを記録し，テストや作文，書写作品や配布物，文集などを学習を振り返りながら整理し，序文や目次，あとがきを付記して一冊にまとめたものである。本単元では７冊残されている。

10 鳴門教育大学図書館学習記録番号5412B14

11 本単元の先行研究には，以下の５論考がある。①野地潤家「解説」（大村はま『大村はま国語教室　３』筑摩書房，1983）②望月敬幸『中学校における古典指導の研究』鳴門教育大学大学院修士論文，1993③佐々木勝司『中学校における古典指導の研究　Ⅰ』鳴門教育大学大学院修士論文，1994④石津正賢「大村はま国語教室における古典学習指導の研究―単元『古典のなかに見つけた子ども』を中心に―」（『月刊国語教育研究』371号，日本国語教育学会，2003）⑤渡辺春美「戦後における中学校古典学習指導の考究―昭和50年代の大村はま氏の古典学習指導の場合―」（『沖縄国際大学日本語日本文学研究』11巻第２号，沖縄国際大学日本語日本文学会，2007）望月は国際児童年に関連させた単元「知ろう世界の子どもたちを」と本単元の学習によって「現在，日本に生きる自分の姿が相対化されて映し出される」と大村はまが発想したことに本単元の特徴を見出している。

12 鳴門教育大学図書館学習記録番号5412B40

13 西尾実「国語教育の問題点」（講演記録）『国語通信』第37号，筑摩書房，1951（『西尾実国語教育全集第７巻』教育出版，pp. 360-361，1975）

14 大村はま（1981）『大村はまの国語教室―ことばを豊かに』小学館，pp. 196-197

15 14に同じ，p. 197

16 ６に同じ，p. 216

17 ６に同じ，p. 217

（兵庫教育大学連合大学院）

2010. 8. 31　発送

NII-Electronic Library Service